



品であると考ええる。

### 3 入試評論を読む際の近代への視点の重要な手がかり

三年生の授業は、進学校の宿命として入試を意識した展開にならざるを得ない。二期期の半ばからは、センター試験も意識しなければならぬ。むろん、週五日制の中、進学を意識した授業は、一年時から組み立てという意識が必須である。このような流れの中で、小説教材をいかに扱うかは、担当者がいつも頭を痛める問題であろう。私は、小説教材を扱う時、それに関連した評論を必ず組み合わせ使用するように心がけている。

二年時の「こころ」では、柄谷行人の「漱石の多様性——こころをめぐって」を、三年時の「舞姫」では前田愛の「ペルリン1888『舞姫』」（いずれも明治書院・現代評論選）を使用して、小説の背景にある時代性等にも言及している。これらは、前述のごとく入試評論を読む上での基本的な視点を形成する上で、欠かせない。教室における小説教材は、もちろん文学的鑑賞も必要であろうが、様々な現代文の読解能力を高めるための訓練や準備でなくてはならないと、私は考えている。個々の作品にこだわることも必要だが、生徒にとつては、その作品は、成長の一過程の一作品であるはずだ。将来にわたって多様な視点や読み方ができてこ

そ、そこに生徒の個性あふれる鑑賞や読解が生じてくるはずである。

### 4 二年時の「こころ」と柄谷公人の評論 そして「現代日本の開化」へ

漱石の「こころ」は文学的に読めば、近代の「自我」とか「エゴイズム」などという定番？の読解になる。私もその点は、授業において指摘もするし、考えさせもする。実際に授業においては、それらに加えて、なぜそのような人物を描いたか？ という漱石のあり方を柄谷公人の評論「漱石の多様性——こころをめぐって」を一つの拠り所にした読解から時代背景へと深めてゆく指導を心がけている。周知の如く柄谷は、この評論の中で二つの遅れを指摘している。一つは「そのつどそのつど、明晰に内省して疑いがないと思つたとしても、それは、すでに媒介されたものであり、その意味で『現在』はいつも『遅れ』ているのです。」という個人の心理の「遅れ」であり、もう一つは、歴史的な問題としての「時勢遅れ」つまり、明治の精神と殉死の問題である。

ここから、私は、授業の発展課題として、次のような問いを考えた。漱石が、明治という時代に何を期待し、何に失望したのか。そして、それでもなお文学者として生きてた

時代背景を考えさせるようにしている。そしてこれを曲がりなりににも考えさせることにより、生徒に現代の基礎となった変革の時代、明治を考えさせるきっかけとしている。(評論の読後に、Kや先生はなぜ死ななければならなかったのか? についてそれぞれの考えを600字程度で書かせて、それらをもとに、まとめを指導者側で行った。)

生徒に、授業後の感想を聞くと「歴史上では、江戸時代から明治時代にカチリと切り替わったように見えるが、人間は、年表のように変わらないんだなあ。」というような感想が多く見られた。そして今後の発展学習として漱石の講義集「現代日本の開化」の概要を紹介した。この作品では、「開化」のためには、日本人は、神経衰弱にならざるを得ないが、それでも開化をすすめる以外に道はないだろう、ということも漱石は滔々と説いている。ここに日本の「近代」が背負う問題がある。これらの諸問題は、最近では、佐藤泉氏の『漱石 片つかない近代』(NHK出版)等をベースとした横試問題でも取り上げられている。

現代の学生が、現代の評論を読むとき、現代の基礎となった明治の文明開化がどのような問題をはらんで展開したかという原点に触れる上で、漱石の一連の教科書教材は、格好の材料ではないだろうか。

## 5 三年時の「舞姫」+「調べ学習」から近代への視点

センター試験を一月に控え、模試に追われる三年生では、「舞姫」のような長編かつ難解な(昨今の生徒にとつては、漢語だらけの古文調の文章を読むのは、難行苦行そのものでしかないようである。)この作品は、授業をする側としては、頭の痛い対象である。(西三河の進学校は、早くて二学期中盤からセンター演習に入るのが三年生の定番である。)しかし、前述のごとく入試を前提にすれば「舞姫」の授業はどうしても、やっておかなければならないものと考ええる。この作品を、日本という国家の枠組に捉えられた、エリート個人の苦悩と捉えるのは簡単だが、それを現代の高校生に提示したところで、彼らはエリスと豊太郎の恋愛に固執してしまうのが、関の山である。

そこで、明治という時代性に注目しつつ、主人公の生き様を読解した上で、その発展学習として明治期の社会的エリートとそれを取り巻く国家や近代へ移行する日本の問題点などに言及しながら発展学習を行うのを三年生「舞姫」の指導の常としていた。今回(平成十四年度)は、読解授業の後、幸いにも一学期中間考査後の数時間が、自由に使えたので、調べ学習的な要素を取り入れて、「舞姫」の発展学習に取り組ませた。

この発展学習の概要は以下のようなものである。

(1) 形式は五名から六名のグループ学習

- (2) 各グループ毎に、読解後の疑問点を提案させて、その疑問点について調べる。
- (3) 調査結果を、週刊誌「舞姫」として、B4判一枚にまとめさせる。

(4) 各グループで発表し、相互に批評し評価する。

(5) 指導者側は、各グループの調査過程を、毎時クリ

アファイルに集積させて、調査の経過を評価する。

(ポर्टフォリオ評価の試み)

この発展学習で、各グループが提出してきた疑問点は、以下のようなものである。

- ① エリート軍医森鷗外「舞姫」執筆の真相
- ② 豊太郎が別の道を進んだら
- ③ 豊太郎は二人いた
- ④ エリス(私)は愛されているのか
- ⑤ なぜ「舞姫」という題名か
- ⑥ 豊太郎の弱さの真相
- ⑦ 豊太郎の間違った道

一見して、誰がモデルか? という疑問や、題名についての疑問が目立つ。生徒は、ここから明治期特有の、日本の近代化における人々の葛藤や問題点の入り口を見つけ始める。むろん、そのような大きな問題に、この程度の指導で、生徒が到達できる訳は決してない。しかし、問題意識は彼らの中にわずかでも残れば、それは近代や現代の考え

る上での、なんらかの参考になるはずである。

この試みの成果については、東京法令出版「月刊国語教育・平成十六年四月号」で述べる予定であるが、その中で最大の成果としては、⑤の疑問を提示したグループが、石橋忍月の評論を持ち出して、文学論争に目をつけ明治時代の文壇の雰囲気に触れたということであろう。

彼らが着目した忍月の意見は「舞姫という表題はおかしい、内容から考えれば『留学生』とか『豊太郎』等が妥当である」ということである。また忍月は、いわゆる「恋愛至上主義」的な発想に好意的な意見であったことも見いだしている。留学し西洋文明の申し子として帰国した鷗外が、実は日本の家父長制度や国家という枠組みに囚われていたのに対して、忍月の自由な発想は生徒たちには新鮮に映ったようである。彼らの感想を拾ってみると「明治の日本をリードしたと言われる『鷗外』よりも西洋的な考え(恋愛至上主義)を持った人がいたのには驚いた。」等という感想があった。そしてここにこそ「鷗外」と明治とを考える端緒が表れたといっても良いだろう。

概要のみの紹介で、わかりにくい点が多々あるうかと思う。しかし、「舞姫」の純文学的な鑑賞に偏るのではなく、その背景や森鷗外という人物の生き様等を関連的に紹介することに、前述したような「近代への視点」のきつかけが生じるはずである。

## 7 現代に二大文豪を教室で読む意味

私は、この二つの作品を二年越しで関連づけて読むことにより、近代（開化・明治）をどう見るか、という方向へ導くことを常としてる。彼らは文学者としては、文豪と呼ばれ、いわゆる成功者としても地位も確立している。しかし、小説の読解から発展学習へと視野を展開していくと、この二人は、意外なことに「近代」に関するスタンスが正反対のように見えてくる。ここからは全くの個人的な意見であるが、二人の近代のとらえ方は、「必要で変わるべきもの」と「守るべきもの」とのせめぎ合いの中で個人をどう捉えるか、という部分に集約されるように思える。

文学としてはもちろん、明治や近代等を扱った評論を読む際の視点の育成や背景の醸成として重要である。まして激しく変化する現代において、「変わるべきもの」、「守るべきもの」、そして「個人」、この三者をどう捉えるかを考える上で若者に教室で読ませたい作品である。

教科書の評論は、ポストモダン、近代の批判が主流である。しかし批判するだけでは次の時代は見えてこない。今までを否定し、批判するのは易いが、そこから新たなものを作り出す時の、人間の葛藤という意味では、鷗外や漱石の思いや悩みは、現代の若者に通じるものがあるはずであ

る。むろん彼らには国家という枠組みがあった。現代の「国家」は、常識的に見て大多数の若者には「枠組み」たり得ない。しかし、それ以外の「枠組み」、例えば、家族、友人、会社、学校など、若者たちが意識する「枠組み」は数多く存在するはずである。小さくてもそれらを守らなければならない場合、そしてその枠組みが外からの要請で変わらなくてはならない場合は、必ず存在する。その時、彼らは、鷗外や漱石の苦悩を共有することがあるはずだ。

時代が急速に変化し、自分の枠組みを変えざるを得ない現代、過去にそのような激変の時代をぐり抜けてきた彼らの思いを読むことは、現代の若者たちにも決して無縁な物語を読む、ということにはならないと考える。そしてそのような悩み多き高校生が生きる教室でこそ、この二人の作品は、時代時代にあつた解釈で読まれてゆくべき作品であると考えている。

### 《参考文献》

『鷗外のオカルト、漱石の科学』長山靖生 新潮社  
助言 愛知県立岡崎高等学校 教諭 村上慎一氏